

地域担い手経営基盤強化総合対策実験事業を活用した事例
(H23及びH24補正経営体育成支援事業)

補助対象者名称：(有) マルイチ農産
事業実施主体名称：佐賀県唐津市
内 容：乗用管理機 1 台、田植機 1 台
事 業 費：6,800千円(国費：2,040千円)

1 事業取組前の状況

(1) 補助対象者の経営状況

(有) マルイチ農産は、唐津市鏡山地区で水稲、麦及び施設イチゴの生産に取り組んでいる。平成18年に法人化する以前から地域の農地の利用集積を進め、大型機械による農業経営の効率化とイチゴとの複合経営による経営の安定化に取り組んでいた。



【市丸社長 (イチゴ育苗ハウスにて)】

<経営内容>

	H23	H25
水稲	28.0ha	26.4ha
麦	17.0ha	18.5ha
イチゴ	0.44ha	0.44ha

(2) その他

唐津市鏡山地区は、近年、施設イチゴ、施設野菜や畜産の盛んな地域であり、特に土地利用型は高齢化が進み、中核農家への作業委託や集落営農による取り組みにより経営が継続できている状況。

昭和52年のライスセンターの整備と併せ機械利用組合が設立され、地域の多くの兼業農家が利用組合に参加した。当時、個人経営を行っていた社長は、自ら機械を保有していたため、利用組合には参加しなかったが、離農が進む中、将来の地域像に危機を感じ、地域の担い手として農地の集積及び規模拡大を進めた。

なお、事業の実施に当たっては、指導農業士や農業委員を務めた関係上、市役所とのつきあいもありスムーズに実施できた。

2 取組の概要

平成18年、農地の集積や規模拡大を図った結果、個人経営としては経営規模が大きくなったため、税制上のメリットや雇用者の就業条件の確保等経営の安定化を図るため(有)マルイチ農産を設立した。また、当時は会社法改正の折であり、法人化に当たっては、県農業会議からアドバイスを受けた。

特別栽培米への取組みや、コーヒーの豆がらを活用した独自の土作りなど、「土作りにまさる技術なし」を信念に取り組むとともに、平成23年及び平成25年には経営の効率化を図るため、経営体育成支援事業を活用して乗用管理機と田植機を導入している。

経営の効率化により、平成25年には常時4人を新たに雇用し、加えて、イチゴの最盛期には臨時雇用を行い、水稲26.4ha、麦18.5ha、施設イチゴ0.44haの大規模経営に至っている。

3 経営改善の効果

乗用管理機の導入は、動力噴霧機による防除作業に比べ、要員が3名から1名と大幅に作業の効率化が図られるとともに、周辺宅地への飛散を少なくすることができた。また、田植機についても高性能化しており、定植後の倒伏を防ぐ機能により作業効率が向上するなど、農業経営の効率

化を図る上で大きな効果を発揮している。

補助事業による機械導入は土地利用型部門の農作業時間の縮小となり、その余剰時間をイチゴ生産に当てることができるようになった。

今後は、目標である「週40時間での農業」の実現に向け、さらなる効率化を図っていく考えである。



4 成功の要因

同社の土作りにこだわった真剣な農作業や、除草等の徹底した農地管理は、農地の貸し手のみならず、周辺の農地の所有者からも信頼された。この結果、地域の農地が集まり、現在の大規模経営に結びついた。また、農地の賃借料を収穫物でも納めているが、法人で所有する精米機で精米したものを家まで届けるなど、地権者への配慮にもこだわり、現在では60人から200筆以上の農地を借り受けるまでに至っている。さらに、大規模化によって、米屋との直接取引が可能となった。

<その他の波及効果>

同社は4名の地域雇用を創出している。このほか、土作りのこだわり、徹底した農地管理が認められ平成23年からは佐賀県農業試験場から、イチゴの品種改良の管理委託を受けている。



【ヤギにエサを食べさせる子供たち】

また、4Hクラブとも連携し、市内の幼稚園に隣接する農地でアイガモ農法やヤギの放牧、イチゴ収穫末期におけるイチゴ狩りなどにも取り組んでおり、田植体験や収穫体験を通じて園児や地域住民に食や命の大切さの理解を深めている。

5 今後の経営改善の方向

作業の効率化を図るためには、農地を集約する必要がある、その際には、暗渠排水や畦の撤去等を併せて実施することが重要と認識している。

農地中間管理機構には期待しており、行政とも連携の上、地域農業の維持発展のために農業法人としての役割を果たしたい。

また、週労働時間40時間の実現を目標にしており、時間を要しているイチゴのバック詰め作業の効率化を図ることが課題としている。



【事業で導入した管理機（左）と田植機（右）】